

ニュース

Pradhan Tej B.S. (プラダン テージ) 先生 のご逝去を悼んで

本学会会員、横浜国立大学助教授のプラダン先生は、先生を長年悩ませてきた扁桃腺削除手術のために入院加療中、本年8月10日急逝されました。昭和30年7月13日のお生まれで享年43歳でした。

先生は、ネパール・カトマンズでお生まれになり、18歳まで現地で生活された後、国費留学生として昭和49年に来日されました。昭和54年に京都大学工学部土木工学科をご卒業後、同学大学院修士および博士課程に進学され、昭和59年に博士課程を修了されました。その後東京大学生産技術研究所の助手を経て、昭和63年に財団法人大阪土質試験所に御転出、平成2年11月より横浜国立大学工学部建設学科に助教授として赴任されました。この間、異なる組織における数多くの師からのご指導、同僚との交流によって、研究活動への情熱が高揚していったとお聞きしております。

先生は、京都大学の学生時代から東京大学助手時代にかけて、特に砂の中空ねじり単純せん断試験の実施と構成式の開発に精力的に取り組まれ、試験装置の開発、結果の整理方法、弾塑性構成式への展開などに関して数多くの論文を発表されました。この間、「Study on the Torsional Simple Shear Test of Sand」の題目で昭和63年度の土質工学会奨励賞を受賞されておられます。先生の研究範囲は、砂の要素試験にとどまらず、大阪土質試験所における実務経験を経て、対象地盤材料も粘土、軽量土、廃棄物と多岐に及び、また実際の設計・施工への展開に対して非常に興味をお持ちでした。学会においても軽量土および廃棄物を対象とした研究委員会の幹事長または幹事として活躍されておられました。また、先生を幼少より育んだアジアにも関心が深く、機会あるごとにアジア諸国で開催される会議に出かけ、研究および教育の輪を積極的に拡げておられました。アジア諸国のネットワークの大きさと緻密さでは先生にかなうものがないというのが現状ではないでしょうか。

ところで、先生を一言で表すなら、「古風な日本人」という言葉がぴったりでしょう。昭和49年の来日以来、人生の半分以上を日本で過ごされ、日本の文化への造詣も深く、「日本とその文化」に関して日本人の私たちが逆に教えをいただいたことも数多くありました。また学生の準備した日本語の論文を丁寧に校正され、日本人以上に格調の高い日本語論文を数多く執筆されたことに対しては驚くばかりです。先生は京都大学工学部在学中に洋子夫人と結婚され、ご子息のRaja(ラジャ)君と3人仲むつまじくお暮らしでした。このような急な悲しみがご家族に及ぼうとは、誰しも想像しえないのことでした。プラダン先生は、このたび日本への帰化を決意され、申請手続も滞りなく行われ、この秋には、日本人として新しいスタートを切られる予定でした。日本で初めての「プラダン家」を構築する喜びに打ち震えながら、その日を今か今かと待たれている矢先の急逝でした。ご家族の悲しみは、いかばかりかとお察しいたします。先生の地盤工学への情熱をこれからも大切に受け継ぎたいと思います。先生が、今まで本学会の発展に尽くされた多大な貢献に感謝しながら、ご冥福をお祈りいたします。



(岐阜大学教授 八嶋 厚)
社団法人 地盤工学会